

五重塔跡

これらの礎石は、かつて圓教寺の境内に立っていたいくつかの歴史的な参詣図や絵巻物に描かれていた五重塔の最後の遺物であると考えられている。1331年に三つの堂を焼き尽くした火災は、大講堂の近くの塔への落雷から始まったと記録されている。その塔には、金剛界曼荼羅の5つの仏像が刻まれており、一方こちらの塔には胎蔵界曼荼羅の5つの仏像が刻まれていたと考えられている。この慣習は、密教の天台宗と真言宗では一般的であり、五重塔は重要な儀式の場所としても利用されていた。

仏教においては、塔は歴史的なお釈迦様や他の聖人のお骨を納める聖骨箱から派生したものであった。そのようなお骨は仏舎利（サンスクリット：サリラ）と呼ばれ、有名な僧侶や尼僧の遺体を火葬したときに水晶のような状態で残る。塔は、国、時代、仏教宗派によってさまざまな形式で建築されているが、日本では3～5層で、塔の上には9段の青銅製の相輪が乗っている。文化的には、塔は、宇宙の中心にある神聖な山である須弥山（しゅみせん）を象徴していると考えられている。